

東女レーモンド建築の保存と活用を切に願って

藤原 房子

東京女子大学は日本で最も美しいキャンパスだと複数の建築家がほめる。確かに道路から見える表の顔は端然と整い優美だが、その奥の豊かな緑の林に、チエコキュビズムの特徴を示すレトロ感覚の瀟洒な白い建物群があるのはあまり知られていない。そのうちの棟・東寮は昨年夏に壊され、跡地に景観と不釣り合いに高いビルが建ち始めた。もう一棟の旧体育館も解体の危機に直面している。

一昨年六月東京女子大学同窓会・総会で、突然この二棟の解体が公表された。私は大学時代ずっと構内の東寮に住み、卒業後新聞記者として働き、多くの運動を見てきたし、趣旨に共鳴するものもあつたが、取材者として常にどの運動とも距離を置いてきた。だがこの通告は二棟を保存し活用する運動の当事者側に、いきなり私を立たせた。建築物に特別な知識や興味があつたわけではないが、以来近代建築の保存に関心を持つことになった。

寮は男女を通じて日本初の鉄筋コンクリート造りで個室だった。狭いながら一人になって瞑想し、祈り、思索する空間である。読書や物思いにふける場であり、ドアに鍵をかけて籠る自由もあれば、散らかし怠けることもむろんできた。だが先に西寮は解体されて売店等になり、東寮もクラブ活動の部屋に利用された末、昨年ついに壊されたのである。

旧体育館は落成時には「体育兼社交館」と呼ばれた。女子の高等教育に理解が乏しかった時代に、あえて体育を重視し、社交性を養う場としての機能を備えた暖炉付きの部屋を建物の四隅に配置している。社会での自己表現に気づかせるユニークな教育の場であつた。

私は在学中はレトロ感覚のしゃれた建物だと、漠然と好



上：東京 下：旧体育館
(photo：たてもの応援団)

感を抱いていた程度だったが、自由な日々を刻み、濃密な青春の思い出が宿っている建物をとり壊す計画には、どうしても納得できなかった。同窓生に声をかけ、発起人二十五人でも賛同者をつのり、資金を集め、情報を共有しながら大学との話し合いを書面で申し入れた。署名は一万二千人に達した。理事長らとの面談も重ねたが昨年夏の最後の公開質問状には回答がない。この間日本建築学会はじめ内外の建築家らによる組織等から保存要望書が十一通提出された。

近年、学校の建物が次々と解体・新築に動いていることを私は知ってはいたが、東女大のキャンパス内の建物群は、平成十年に登録有形文化財に指定されたとのニュースを新聞で読んでいたから、まさか二棟が消えるとは迂闊にも思っていなかった。しかし指定されていたのは大学が申請した七棟だけで、今回問題になった二棟は近く壊すことを想定した申請だったのか、最初から外されていた。だが小さい記事では残念ながら詳細がわからなかった。

さつそく文化庁に行き、寮は教育史にも特記すべき画期的かつ斬新な建物であり、体育館は別名「社交館」とも呼ばれ、他に類をみない理念を顕し、女子高等教育の先駆をなす歴史的価値があると力説した。係官は熱心に聴いてくれたが、文化庁としては全棟を守りきれず実に残念、大学側の意思だからやむを得ないと苦渋を語るのみだった。

東京女子大の善福寺キャンパスは、チエコ系アメリカ人のアントニン・レーモンドがランドデザインを任せられ、大

学創立に動いた安井哲、カール・A・ライシャワー、新渡戸稲造ら三先達の教育理念を形にしたものである。建築に要した費用の大半が英米やカナダのキリスト者の寄付によって賄われたという。

創立時、新宿区角筈にあった仮校舎から、学生も折々に通って植樹で奉仕し、一九二四年に杉並区に移った。問題の二棟は西校舎一棟とともに初期の建築で、完成直前に関東大震災に出くわしている。だがレーモンド自伝によると体育館は無傷、寮は一部の厨房設備など被害はごく軽微とあり、建築構造学の西沢英和教授（関西大学）も本格的な耐震テストを受けたようなもので強度は保証済みと明言する。

にもかかわらず解体の最大の理由は地震等の災害から学生の命を守るためプラス老朽化だとの説明を大学は変えない。撤去した跡地は緊急避難の空地にするという。どんな事態を想定しているのだろう。広いグラウンドに向けて避難・誘導訓練をする方が、狭い空地に学生を集めるよりは現実的で、効果があると思う。また外より堅牢な建物内にいる方が安全だとは最近よく聞く説である。

文化財に登録済みの他の校舎群は大正末から昭和にかけて次々に完成しており、寮と旧体育館だけが特に古くて脆弱なわけではない。旧体育館について言えばむしろフロアを低く掘り下げた構造が見せる姿は、キャンパス全体の景観にマッチし、フロアの広い天井に通されたパイプによつて強度が保たれ、さらに四隅の講義室が安定度を高め、加えてテラスやバルコニーなどが揺れ止め効果を持つ、巧みな設計だと建築家三沢浩氏は認めている。

学生による調査研究「旧体育館の研究」が昨年度の同大学・学会賞を得て好評だし、教授たちは過半数に達する署名で大学に再考を求めた。しかし機関決定したからと、「すべては予定通り」の繰り返しに直面している。この貴重な一棟がどうなるか、状況を見守り続けている（〇八年八月現在）。

（ふじわら） 東京女子大学レーモンド建築
東京・旧体育館を活かす会代表、東京在